

## モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲第 5 番イ長調 K.219「トルコ風」

モーツァルトの 5 曲あるヴァイオリン協奏曲がすべてザルツブルク時代に書かれているのは、ザルツブルク宮廷オーケストラのコンサート・マスターをつとめるモーツァルトが、新作協奏曲の独奏パートを自ら弾き、ヴァイオリン奏者としての力量を華々しく披露する機会がたびたびあったからである。ザルツブルク時代のなかでも 1775 年はモーツァルトの「ヴァイオリン協奏曲の年」であり、第 2、3、4、5 番が、それぞれ 6 月、9 月、10 月、12 月と相次いで作曲されている。

《ヴァイオリン協奏曲第 5 番》は「トルコ風」の愛称をもつが、その由来は第 3 楽章の中間部が、トルコの軍楽を連想させる異国的な音楽であることによる。18 世紀のヨーロッパにとって、現在のトルコであるオスマン・トルコは脅威である一方、その文化は憧れの対象でもあった。とくに強烈なアクセントのついたリズムを伴って鳴り響く軍楽隊の音楽はブームとなり、モーツァルトやベートーヴェンの「トルコマーチ」のように、トルコ風の新たな楽曲も人気を博した。トルコ・ブームの影響は楽器にも及び、ベルと太鼓を鳴らすことができる「トルコ式ペダル」をもつピアノが開発されたほどであった。

モーツァルトのヴァイオリン協奏曲の締めくくりとなるこの「第 5 番」には、形式上の新たな試みもみられる。協奏曲ではふつう、オーケストラが主題を提示した後、独奏ヴァイオリンが同じ主題をあらためて奏するのがふつうであるが、この曲では、それとは別の緩やかな旋律を奏する。そのあと快速な冒頭主題が登場する時にも、独奏ヴァイオリンは主旋律をオーケストラにまかせ、その対旋律を奏でる。むしろこちらが本当の主旋律のようにさえ聞こえてくる。この破格の展開に、協奏曲を聴き慣れた人々も驚いたに違いない。創意にあふれるこの作品は、第 3 楽章に異国の要素を持ち込むことによって、いっそう個性的な輝きを増した。

第 1 楽章：アレグロ・アペルト、イ長調、4 分の 4 拍子、ソナタ形式。イ長調主和音（ラ・ド#・ミ）の分散和音で軽快に上昇する第 1 主題、16 分音符の下降ではじまる可憐な第 2 主題をオーケストラが提示した後、独奏ヴァイオリンが緩やかなテンポでラ・ド#・ミで始まる新旋律を、そのあと冒頭主題の対旋律を奏でるところに注目したい。展開部が新しい短調の主題で始まるのも珍しい。

第 2 楽章：アダージョ、ホ長調。4 分の 2 拍子。装飾された美しいメロディをもつ緩徐楽章。

第 3 楽章：ロンド、テンポ・ディ・メヌエット、イ長調、4 分の 3 拍子。典雅なメヌエットの中間部はイ短調となり、異国情緒あふれる「トルコ風」の音楽が強烈なパワーで吹き荒れる。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：オーボエ 2、ホルン 2、弦五部、独奏ヴァイオリン

※スコア上の表記